平成２９年度第２回 刈谷市国際化・多文化共生推進委員会
議事録

■ 日　時　：　平成３０年１月１７日（水）１４：００～１６：００

■ 場　所　：　刈谷市国際プラザ２０１会議室

■ 出席者

団体名	役職等	氏名
愛知淑徳大学	名誉教授	榎田　勝利
国立大学法人　愛知教育大学	学生・国際課国際交流室長	三浦　秀樹
刈谷市教育委員会	学校教育課　指導主事	土井　淳
刈谷市国際交流協会	常務理事兼事務局長	藤田　勝俊
一ツ木自治会	会長	坂倉　聖児
株式会社ベルテック	取締役部長	小池　ソニア
認定特定非営利活動法人 アジア車いす交流センター	事務局長	大河内　弘幸
市民委員		平野　紀久子
刈谷市役所	市民活動部長	西村　日出幸

■ 欠席者

団体名	役職等	氏名
愛知県国際交流協会	交流共生課長	栗木　梨衣
株式会社豊田自動織機	人事部グローバル人事室管理グループ長	小林　美保

■ 事務局

所属	補職名	氏名
市民協働課	協働推進監兼市民協働課長	近藤　敦人
市民協働課	課長補佐兼地域支援係長	高橋　理一郎
市民協働課	協働推進係長	酒井　武士
市民協働課	主任主査	福田　倫
NPO 法人 NIED・国際理解教育センター	事務局長	川合　眞二

■ 配付資料

議事次第、委員名簿

資料１　刈谷市国際化・多文化共生推進計画第３期重点協働プロジェクト（案）

■ 議事録

１．開会あいさつ

◇ 委員長あいさつ：榎田委員長

・本年度は刈谷市国際化・多文化共生推進計画第２期の最終年度である。これまで６年間計画に基づき委員会を行ってきた。計画は、６年前に日本人市民や外国人市民に対してアンケート調査を行い、市民が参加しながら策定したものである。当時からしばらくは市民の期待と意欲的な参加があった。第２期までの間で、この委員会の委員も替わり、市役所の職員も異動があり、関わる人が変わっているので、元々の計画の内容や当初の理念についてレビューしながら、立ち位置を確認し進めていく必要がある。また、刈谷市民、関連する各種団体など各セクターの意向や国際化・多文化共生に関わる動向は、この６年間でどのような推移しているかについても確認し、計画の原点に返りながら進めていく必要がある。

・特に、刈谷市は愛知県内でも先進性がある取組みを行っているので、今後とも他のモデルとなるような形で進められるとよい。こうしたことを踏まえて、第３期の計画内容について、委員の忌憚のないご意見をいただきたい。

２．議題

（１）前回の委員会の振り返りについて

◇事務局から、資料１に基づき、前回の委員会で説明した内容（刈谷市の外国人の状況、第２期重点協働プロジェクトの進捗状況と評価）について振り返った。

（２）第３期重点協働プロジェクト（案）について

◇事務局から、資料１に基づき、第２期重点協働プロジェクトの進捗状況と評価に対する第３期重点協働プロジェクトの事業の方向性について、説明を行った。

＜ここまでに関しての意見交換＞

委員長：説明に対してご意見はあるか。

委　員：様々なイベントを行っているが、子供会に参加するような外国人につながっているか。子育て支援づくりにも関係すると思う。そのあたりはどうか。

委　員：一番の悩みは、イベント以外で継続して参加してくれる外国人が少ないことである。本来は外国人の声が反映されたプロジェクトになることが一番よい姿だと考えている。外国人の声が反映されないことが外国人の定着にもつながっていないと思う。

委　員：ブラジル人に関しては、会社で異動することが多いので、定着しづらいところはある。土日も働いていて忙しいのも参加できない理由である。地域にこうした活動があることを根気よく広

報を続けていって興味を持ってもらうしかないと思う。子どもがいる家庭の方が、興味を持ってもらえる可能性が高いと思う。ここまで５年間行って来ているが、まだまだ浸透していないのではないか。

委員長：一ツ木地区の学校との接触はどうか。ＰＴＡの活動の中にこの活動が位置づけられるとよい。

委　員：イベント案内など地域の幼稚園などにアプローチはしている。

委　員：活動に行き詰まっているところもあるので、子どもを通じてチラシを配付している。ＰＴＡ活動の中に位置づけるという意見は面白いと思う。

委員長：アメリカではファミリーボランティアが盛んである。そうした視点とワールデンを結びつけられるとよい。

委　員：菜食主義（ビーガン）のブラジル人の知人がいて、野菜の育て方を教えてほしいということも聞いている。そうした人にアプローチできるとよいのではないか。

委員長：モデル地域については、外国人の参加がポイントなので、具体的にどのように達成させるかに期待したい。次にESD推進メニューの講師はとても少ないが、どういう状況か。

事務局：愛知教育大学に協力依頼をして、留学生の講師を４人確保した。企業社員については、市民協働課の他事業に参加していた市民の方にご協力いただいた。しかし、刈谷市の中でアクティブラーニングにつながる人を見つけるのが、一つのハードルになっている。各プログラムの試行を重ねる中で、適材となる講師を確保していきたい。

委員長：講師になることにメリットや誇りになることにつながればよい。交通費や謝金は支払っているか。

事務局：謝金は用意している。交通費や交通手段についても考えている。

委員長：名古屋国際センターが行っているような民間大使という称号を与えるなど、自分の国を代表するというような仕組みを作るとよい。また、リタイヤした人にもアプローチするとよい。

委　員：刈谷市にはリタイヤした人はいると思うが、現状としてはそれほど多くない。若い世代がまだまだ多い。

委員長：刈谷北高校の反応はどうか。

事務局：国際理解コースの生徒に行った。２時間を使って、デンソーの社員に海外赴任経験（アメリカ、アルゼンチン）について語ってもらった。キャリアを考えるという視点では、困ったことや対処方法について一緒に考えることができた。他の授業との関連ができればよりよかったという教員の意見があった。

委員長：教員にも講師になってもらえればよい。学校には関連する担当教員はいるか。

委　員：国際理解教育の専任の担当はいない。関心のある先生同士で研究しているところは一部である。英語教育が小学校に導入されるので、それに対応する担当は出てくる。

委員長：教員で青年海外協力隊に行った方はいるか。

委　員：何人か知っている人がいる。

委　員：日本語ボランティアで青年海外協力隊に行った先生を知っている。

委　員：市長に表敬訪問しているので、そこからも把握はできる。

委　員：デンソー元社員などで、私たちの活動のボランティアに関わってくれる人が何人かいる。

委員長：歳を取った人は自分の経験について知って欲しいと思っているし、貢献してくれると思う。魅力的な内容で魅力的な講師がいると、自ずと広がると思う。内容と広報を両輪で進めていく必要がある。

委　員：刈谷市の地域ごとに外国人の国籍の傾向はあるか。

事務局：それぞれの中学校区でフィリピン、ブラジル、中国が一番多いなど特徴がある。

委員長：外国人のネットワークにつながらない現状についてどうか。

委員長：名古屋市では、名古屋フィリピン友好協会が開催する年に１回大きなイベントがある。中国も同様である。ブラジルもそうか。

委　員：カトリック教会がその位置づけになっている。プロテスタント系の教会にも人が集まっている。

事務局：名古屋市に出かけていけば、事が済むという側面もあるかもしれない。

委員長：国際交流協会では、各国に関するイベントはあるか。

委　員：国際交流フェスタ、ワールドキッチンといったイベント・講座を開催している。名簿は作っており、中心的に関わってくれる外国人とは情報交換している。

委員長：東浦町のフィリピンコミュニティ団体から学ぶとよいのでは。

事務局：一度刈谷市のフィリピンコミュニティについて問い合わせたことはあり、刈谷市では家族程度のつながりしかないとの返事をもらったことがあるが、今後は成り立ちなど先進事例として学びたい。

委　員：ネットワークの形成のアイデアは具体的に何かあるか。

事務局：外国人のためのガイドブックづくりを協力者と一緒に行いながらネットワークづくりにつなげられるとよいと考えている。ガイドブックの内容も、行政的なものではなく、各国料理の食材が売っている場所とか、先に刈谷市に住んだ先輩外国人が後から来た外国人に教えられるようなものにしたいと思う。

委員長：ネットワーク自体が目的ではない。何のためのネットワークかを押さえる必要がある。

事務局：行政とのつながりがないことが一番の課題である。それぞれの接点を作り、関係性を築きたい。また、災害時の対応などの情報伝達ができることにもつなげたい。

委　員：ＰＴＡ活動の話が出たが、一ツ木地区は子供会活動が盛んなので、どちらかというとそちらと連携できるとよいのではないか。何をするか方向が定まらない子供会自体のメリットにもなる。

委　員：外国の子どもも子供会にちらほら参加している。

委　員：町内会には外国人は入っているか。

事務局：日本人の自治会加入率は 67～68%。外国人はもっと低いと思われる。

委　員：市民だより、回覧板で呼びかけているか。

事務局：市民だよりの日本語が読めないことや、回覧板は自治会に加入している世帯にしか回らないことがネックである。

事務局：ワールデンのイベント案内は３カ国語で作って回してもらっているが、外国人の世帯に届けられているかどうかわからない。過去には直接伝えるために個別訪問したこともある。

委　員：一ツ木地域には９つの広報板がある。そこにワールデンの案内を貼ってもよいか。

事務局：各地域の判断で貼ってもらってよい。

委　員：見かけたとしても敷居が高いと参加しづらい。しかし、田植えの時はとても参加者は喜んでいた。そういうことを知っている人が口コミで呼びかけられるとよい。

委　員：ケータリングの業者やブラジル人が利用するピザ屋などは、外国人についての情報は持っている。そこにチラシを配布するなどの協力が得られるとよい。

委　員：ワールデンの近くの教会はフィリピン人が行っているので、協力を求めるとよい。

委員長：スーパーマーケットなど日常的な買い物場所に情報があることが一番大切である。消費者サービス、社会貢献の一環として協力を求めるとよい。

委員長：ガイドブックの内容は生活便利帳がよい。

委　員：スーパーのチラシのメニューに、刈谷市の防災のことはここで見られますという情報を掲載するとよい。

委員長：大府市のキンブルのような外国人が集まるお店は市内にないか。

委　員：野田町のお店、ドンキホーテには外国人がよく買い物をしている。

委員長：情報を知っている人から時間をかけて情報を集めるとよい。情報収集のためボランティアを募るのもよい。

委員長：第３期は４年間ある。メリハリを付けて実施していく必要がある。

（３）今後の予定について

◇事務局から、資料１を基に、今後のスケジュールについて説明した。

◇第２回を終えるにあたり、委員一人ずつ意見を以下のとおり述べた。

委　員：今回初めての参加である。一番最初からワールデンのプロジェクトに関わっている。このプロジェクトの目指すところは、外国人が主導して私たちと一緒にまちづくりができるとよいと考えている。個人的にも外国人とのつながりが深まり交流できたらよいと考えている。

委　員：永住する外国人が増えている。赤ちゃんから老人までの多様な年代層に対して考える必要がある。外国人を支援するのではなく、支え合うということを考える必要がある。多文化という言葉自体がなくなる、意識しなくなることを目指せるとよい。

委　員：ワールデンが、外国人の声から始まったものではないことが気にかかる。学校でも外国人の困り感と日本人の考えることとのギャップが生じることがある。外国人のニーズをしっかり把握して始めることが大事だと考えた。

委　員：多文化共生の観点はますます必要になる。ESD メニューの講師に留学したことのある日本人学生にも声をかけて欲しい。

委　員：外国人の困っていることは、病院のこと、保育園・学校のこと、掲示物があっても内容がわからないことなどである。とはいえ、なんとかやっているのも事実である。

委　員：ESD 推進メニューについて、引き続き協力していきたい。

委　員：小学５年生のフィリピンの子どもに日本語学習をした時に、きちんと挨拶はできるけど、「上下」の漢字がわからなかったり、割り算ができないという状況を見た。日本で生まれた子どもだけど、学力がついていない子どもがいる。家庭ができない学習支援が必要であることを感じている。

委　員：外へできるだけ出て行くようにし、いろんな情報を集めていきたい。

委員長：外国人からの要望があってのワールデンができたわけではないので、善意の押し売りにならないようにしなくてはいけない。相手の気持ちを察するとか忖度するといった活動が起こりがちであるが、彼らの意向は率直に聞く必要がある。この６年間で関連する市民団体が育っているかどうかを問う必要がある。もし育っているとしたら、そうした団体に委託したり、協働するというステップに移行する必要がある。少人数のスタッフでよい活動をしている市町村もあるので、そこから学ぶ必要がある。フィリピン、ブラジル、中国の主要国籍だけでなく、外国人が一人でも住めば多文化共生が必要となる。「足のサイズにあった靴を用意する。」ことが必要である。今後のプロジェクトには、そうしたことを踏まえ検討してもらいたい。